

ディスカッションペーパー・シリーズ 2002-02

**黄昏の幸せ**  
- 高齢者の幸せ感を支えるもの

松浦 克己\*

2002.4

---

\* 郵政研究所特別研究官（横浜市立大学商学部教授）

## 黄昏の幸せ

- 高齢者の幸せ感を支えるもの

横浜市立大学商学部 松浦 克己

### (要旨)

人生の黄昏 - 高齢期 - において自分が幸せであると感じられることは人生にとり至福である。そのように評価できる人々が多い社会の厚生は高いであろう。従来幸福感は効用の比較はできないとして経済学で取り上げられることは少なかった。しかし経済的な出来事は人々を幸せにする限りにおいて重要なのであり、政策の究極の目的もそこにある。我々は「横浜市民の消費行動・生活意識に関するアンケート調査」(2001年9月)により、60歳以上の高齢者の幸せ感を支えるものが何であるかを検証する。

そこでは高齢者の幸福感を支える経済的指標は消費と資産(貯蓄残高)であり、収入ではないことが明らかにされる。また女性、持ち家、子供と同居せず、家族と食事を一緒にする人々がより幸せであり、男性、賃貸、子供と同居、家族と一緒に食事にしない人々が余り幸せではないことが示される。

社会保障政策の対象としての高齢者は、賃貸住宅に住む人を重点にする事が妥当であること、子供と独立した高齢者世帯という家族類型を前提とした政策の展開が望まれる事が明らかにされる。

## 黄昏の幸せ

### - 高齢者の幸福感を支えるもの

2002・4

横浜市立大学 松浦克己

#### 1 はじめに - なぜ幸せを考えるのか

##### (幸せ感に関する調査)

人生の黄昏 - 高齢期において - 現在の自分が幸せであると思えることは、人生にとり至福であるといえよう。幸せに思う、あるいは幸せではないと思うというのは、その人の主観的な評価である。幸せ感は一トータルな生活評価を表すもので、人々の厚生 (well-being) や効用 (utility) に対する評価を端的に示している。多くの人々が幸せと感じられる社会は、社会的な厚生が高いといえるであろう。逆に多くの人々が幸せと感じられないような社会は、何らかの病理が強く存在するであろう。内閣府 (旧総理府) では 1958 年以來、「国民生活に関する世論調査」で現在の生活に対する満足度や現在の生活に対する充足感を定期的に調査している。そこでは「あなたは、全体として、現在の生活にどの程度満足していますか。」という質問に対し、「満足している、まあ満足している、やや不満だ、不満だ、どちらともいえない、わからない」との回答肢が用意されている。この内閣府による調査も、人々の幸せ感が社会全体の厚生と深く関わるという問題意識に基づくものである。

米国でも世論調査で幸せ感について直接的な質問が行われ、分析が進められてきた。たとえば 1972 年以來、一般世論世調査 (General Social Survey - GSS) では「一言でいってあなたは現在の暮らしについて、大変幸せですか、それとも少し幸せですか、あるいはあまり幸せではありませんか」ということが質問さ

れてきた (National Opinion Research Center)<sup>1)</sup>。

ヨーロッパでも 1973 年以來、旧 EC 加盟国を対象に欧州世論調査 (Eurobarometer Survey) で同様の調査が行われてきた<sup>2)</sup>。

(なぜ幸せ感は考察されることが少なかったのか)

しかしながら欧米や我が国の経済学の世界では「幸せ感 - Happiness」というものが直接的に取り上げられることは希であった。充足感に関する分析も生活の限定した場面、たとえば職業生活に関して行われることが多かった(最近の例としては英国について Clark [1997] がある。わが国では転職者に関して満足度を調べた黒澤 [2002] がある)。経済学で「幸せ感」が余り取り上げられなかったのは基数的効用 (cardinal utility) と序数的効用 (ordinal utility) の評価に関する長い論争や個人間の効用の比較を避けるというミクロ経済学の伝統が背景にある (Dixit [1997]、Ng [1997] 参照)。また幸せ感が生活全般に対する主観的な評価であるから、その技術的な分析が困難であると考えられた事も影響していよう。米国での分析も心理的側面 (たとえば Kahneman et al [1999] 参照) や社会学的側面 (たとえば Mroczek and Kolarz [1998] 参照) の研究が中心であった。

(幸せ感と厚生、政策)

しかし最近では所得や物的な充足、教育の影響など経済的な分析も進められるようになった (Easterlin [1974] が最初の本格的な分析である。先行研究の包括的なサーベイに Elster [1998] と Rabin [1998] がある)。厚生を考える経済学にとって、人々の満足感、幸せ感を支えるものが何であるかに無関心であるわけにはいかないであろう。我々は日々様々な選択を行い、その結果として今日の生活

---

1) 質問は、Taken all together, how would you say things are these days - would you say that you are very happy, pretty happy, or not too happy? である。GSS 以前は US AIPO poll data により、同趣旨の調査が行われていた。

2) 質問は、On the whole, are you very satisfied, fairly satisfied, not very satisfied, or not at all satisfied with the life you lead? である。

がある。たとえば山紫水明の地に住み低所得を甘受する生活もあれば、混雑の地に住み高所得の職を得るとい生活もあるだろう。人々は明らかにそれを評価して選択している。そのことを否定することはできない(Ng[1997]参照)。社会全体では、様々な組合せの選択とそれに対する評価が行われていることはより明瞭である。たとえば毎年編成される国や地方自治体の予算では、A というプロジェクトは採択され B というプロジェクトは採択されない。C というプロジェクトには 100% 予算がつくが、D というプロジェクトには 50% しか予算がつかない。これは様々な選択に対する社会的評価である。このことは我々が日々経験していることである。何が人々をより幸せにしているのかを分析することができれば、経済学は政策当局者に何を選択すればよいのか、いかなる組合せがより望ましいのかを提示することができる。言い替えれば経済的な出来事は、それが人々をより幸せにする限りにおいて重要なのであり(Oswald[1997]参照)、その手がかりを与えることができるようになる。

#### (本稿の特徴)

本稿では以上のような問題意識に基づき、2001年9月に実施された「横浜市民の消費行動・生活意識に関するアンケート調査」(横浜市大商学部消費行動研究会、以下「横浜アンケート」ということがある)により60歳以上の横浜市民を分析対象として、その幸せ感が何により支えられているかを実証する。急速に進行する高齢化の中で、どのような要因がその幸せ感を支え、逆に不幸せ感を生み出しているかを明らかにすることは、単に高齢者政策を考える上でのみならず、今後の分配政策を考える上でも有益であろう。

本稿の特徴は二つある。一つは幸せ感を支える源泉として所得(収入)のみならず、消費と資産(貯蓄残高)にも注目したことである。これは消費が生活水準(standard of living)の物的側面をより直接的に反映していると考えられること。及び対象が60歳以上という定年を迎えた引退世代が中心であるので、生活の源泉(level of resources)はフローの所得というよりはストックである資産に現れるとみられることからである。第二は幸せ感を集計された平均値で捉えるのではなく、個票データに基づき順序づけられたプロビットモデルで非線形の形で捉えることである。筆者が知る限り、この二点は少なくとも日本では初めての

試みである。

以下本稿の構成を簡単に述べる。次節で先行研究で発見された事実を簡単に紹介すると共に本稿で用いるデータの概要について説明する。第3節では計量方法を紹介すると共に推計結果を提示する。第4節では幸せ感に影響する消費や資産、あるいは家族構成について簡単なシミュレーションを行い、何が高齢者の幸せ感を支えているかを明らかにする。最後に本稿のまとめが紹介される。

結論を先取りすれば、高齢者の幸せ感を考える上で、基本となるのは消費、あるいは(金融)資産である。所得(収入)は人々の評価を追い切れていない。より幸せなグループは女性、一戸建て持ち家・集合住宅持ち家、子供とは別居、家族とは毎日食事をする人々である。男性、賃貸住宅、子供と同居、家族とは毎日食事を一緒にしているわけではない人々は、余り幸せではない確率が高い。有病や配偶者の不在、一人暮らしは人々の幸せ感に影響していない。

## 2 先行研究とデータ

### 1) 先行研究で発見された事実

(欧米)

Oswald[1997]は欧米のデータを基に人々の集計された幸せ感について、以下のようにとりまとめている。

長期的な経済成長(所得の増加)は、人々の幸せ感を緩やかに増加させている。しかし劇的に上昇させるといほどのものではない(表1参照)。

表1 米国における幸せ感(%) (Oswald[1997])

年	大変幸せ	少し幸せ	余り幸せではない
1946	39		10
1947	42		10
1948	43		11
1952	47		9
1956	53		5
1957	53		3

1972	30.3	53.2	16.5
1980	33.9	52.7	13.3
1990	33.4	57.6	9.0

注 1)1957 年までの原典は、US AIPO poll data を利用した Easterlin[1974] である。  
Very happy, Not veryhappy が質問項目である。

注 2)1972 年以降の原典は GSS を利用した Blanchflower et al[1993] である。

英国の例を基にすると、失業者の精神的抑圧感 (distress levels) は、雇用者や自営業者に比べかなり高い。最小を 0、最大を 12 にスコア化すると失業者の平均 2.98 に対し、雇用者は 1.45、自営業者は 1.54 である<sup>3)</sup>。

幸せ感 は年齢に関し U 字型である。30 歳代で最小となる。

仕事に関する満足感 は、英米共に 1970-1990 年という長期間に渡りほとんど上昇がみられない。

Easterlin[2001] は、長期的にみた場合所得の上昇は人々の平均した幸せ感に影響はしていないが<sup>4)</sup>、

クロスセクションデータによる場合(一時点での評価)、所得が高いほど幸せ感 は増加する、としている(表 2 参照)。

表 2 1994 年における所得レベル別幸せ感 (Easterlin[2001]) (%)

世帯年収	平均スコア	大変幸せ	少し幸せ	余り幸せでない
全体	2.4	28	60	12
75000+	2.8	44	49	6
50-74999	2.6	36	58	7
40-49999	2.4	31	59	10
30-39999	2.5	31	61	8
20-29999	2.3	27	61	12
10-19999	2.1	21	64	15
~10000 ドル	1.8	16	62	23

注 1)GSS による。

3)British Household Panel Study の General Health Questionnaire - GHQ による。ここでは基数的効用が仮定されている。

4)Frank[1997] も同様の報告を行っている。

注 2) 大変幸せ=4、少し幸せ=2、余り幸せでない=0 でスコア化。基数的効用が仮定されている。

クロスセクションデータで所得が高いほど幸せ感も高まるが、長期では所得の上昇にも関わらず極めて緩やかな上昇か、もしくは余り上昇が観察されない理由としては、人々が所得の絶対的水準 (absolute income) で評価するのではなく、準拠集団と比較した相対的な所得 (relative income) で評価していることが指摘されている (Oswald [1997], Easterlin [2001] 参照)。

Oswald は、報告された幸せ感 (well-being) を個人の属性で回帰すれば、異なる時期、異なる国、更に幸せ感の尺度が異なっても類似した推計結果が得られるであろうとし、次のようにまとめている。

アンケートで報告された幸せ感は、既婚者、高所得、女性、白人、高学歴、自営業、引退した人、家庭を顧みる人の間でより高く、年齢について U 字型である。

(国民生活に関する世論調査)

わが国では国民生活世論調査が、満足感という用語を使い定期的に調査をしている。それによれば、

平均的な満足感は、その時々を経済情勢に反応しているように見えるが、1958 年から一人当たり所得が 5 倍以上増加したことを考えれば、長期的には非常に安定している (Veenhoven [1993])。

直近の 2001 年の調査によれば、平均すると

年齢に関し U 字型であり、40 代が最小である。

全ての年代にわたり女性の方が男性よりも満足感が高い。たとえば 60 歳代では満足しているは 5.2% (男性) と 8.1% (女性) である。

持ち家の人の満足感 (64.3%) の方が賃貸住宅に住む人の満足感 (50.6%) よりも高い。

職業別では余り明瞭なことはうかがえない (自営業 57.2%、雇用者 59.4%、主婦学生以外の無職 62.8%)。

年齢に関し U 字型という点では欧米と共通している。しかし職業の効果に



については若干異なるようである。

## 2) 横浜市民の消費行動・生活意識に関するアンケート調査

横浜アンケートでは、「現在の自分は幸せだと思う」という質問に対して「そう思う、少しそう思う、どちらともいえない、少しそうは思わない、そうは思わない」という5段階の回答が用意されている。なお以下では「を大変幸せ、を少し幸せ、を普通、を少し不幸せ、を大変不幸せ」と表記することがある。また、余り幸せでない=普通+少し不幸せ+大変不幸せ、と定義する。この設問の組み直しにより回答肢はGSSと共通することになると言えるであろう。

後述するように推計は消費支出による場合、収入による場合、収入・資産による場合の三通り行った。分析に当たり必要な項目について無回答のサンプルは除いた(たとえば消費により推計するケースでは年齢、性別、住居の形態、消費支出、幸せ感のいずれかの項目について無回答のサンプル<sup>5)</sup>)。また回答者の年齢が60歳未満のものも除いた。消費によるケースではサンプルは1061である。消費を取り上げたケースを中心にここでは簡単に見てみる(記述統計は表3に掲げるとおりである)。

2001年に実施された国民生活世論調査の60歳以上と比較すると、横浜市の高齢者の幸せ感(不幸せ感)は、非常に高い(低い)。国民生活世論調査では満足しているは男性で5.2%(60代、無回答を含む)、9.1%(70歳以上)、女性でも8.1%(60代)と17.1%(70歳以上)に過ぎない。やや不満と不満を合計すると40.5%(60

---

5)所得によるケースでは、消費に替えて、本人・配偶者・その他の世帯員の年間収入について全て無回答のサンプルを除いた。所得・資産によるケースでは、本人・配偶者・その他の世帯員の年間収入について全て無回答のサンプルに加えて、貯蓄残高無回答のサンプルも除いた。したがって消費によるケースと所得によるケースはサンプル数は1061で偶然一致しているが、その対象は若干異なっている。

代男性)から 23.7% (70 歳以上女性)に上る。これに対し横浜アンケートでは、52.6%が大変幸せと答え、少し不幸せと大変不幸せは合計しても 3.5%にすぎない。対象地域が全国と横浜市と異なること、設問が微妙に異なることが影響している可能性がある。

表 2 に示した米国の全体と比較すると、大変幸せと少し幸せを併せると、その内訳は逆転しているものの、横浜アンケートでは 81%、米国では 88%と類似している。余り幸せでないは横浜アンケートで 18.9%であるが、米国では 12%である。時期の違い、国情の違い、60 歳以上に限定する横浜アンケートと世代を高齢者に限定していない GSS の年代層の差を考えれば、この二つの結果はかなり類似していると言えよう。

=====表 3=====

なお以下の分析では、少し不幸せと大変不幸せの比率が著しく低いので、これら二つのカテゴリーと普通のカテゴリーを統合した余り幸せではないを用いる。すなわち 大変幸せ、 少し幸せ、 余り幸せでない、の 3 カテゴリーにより分析する。

### 3 計量方法と推計結果

#### 1) 被説明変数が順序づけられる (ordered dependent variable) 場合の推計方法

ある人の反応が そう思う、 少しそう思う、 どちらともいえない、 少しそうは思わない、 そうは思わない、 というように順序づけられている場合がある。その順序づけられた反応 ( $y_i^*$ ) が、次のような関数であるとする。

$$y_i^* = b_0 + b x_i + e_i \quad 1)$$

ここで  $b_0$  と  $b$  は推計されるべきパラメータ、 $x$  は説明変数、 $e_i$  は誤差項とする。

通常  $y_i^*$  は直接観察することはできない潜在変数 (latent variables) である。  $y^*$  が  $- < y^* <$  の範囲で分布するとして、我々が観察できるのは

$$\begin{aligned}
Y_i=1 & \text{ if } a_0 < y_i^* & a \\
Y_i=2 & \text{ if } a_1 < y_i^* & a \\
Y_i=j & \text{ if } a_{j-1} < y_i^* & a \quad j=1, \dots, J \quad 2)
\end{aligned}$$

---


$$Y_i=J \text{ if } a_{J-1} < y_i^* \quad a$$

である。ここで  $a_j$  は閾値である。このようにセンサーされた形となっている。

ここで識別のために  $b_0=0$  の制約を仮定する<sup>6)</sup>。2)式から  $Y_i=1$  となる確率は以下のように示される。

$$\begin{aligned}
\Pr(Y_i=1 | x_i) &= \Pr(a_0 < b x_i + e_i \quad a) = \Pr(a - b x_i < e_i \quad a - b x_i) \\
&= \Pr(a + b x_i) - \Pr(a - b x_i)
\end{aligned}$$

分布関数としてと標準正規累積分布関数を仮定すると順序プロビットモデル (ordered probit model) となる (Long [1997], Franses and Paap [2001] 参照)。各々の順序を取る確率は、順序が  $1, 2, \dots, j, \dots, J$  までであるとして、

$$\begin{aligned}
\Pr(y_i=1 | x_i) &= \Phi(a_1 - b x_i) - \Phi(a - b x_i) = \Phi(a - b x_i) - \Phi(-a - b x_i) \\
&= \Phi(a_1 - b x_i) \\
\Pr(y_i=2 | x_i) &= \Phi(a_2 - b x_i) - \Phi(a - b x_i) \\
\Pr(y_i=j | x_i) &= \Phi(a_j - b x_i) - \Phi(a_{j-1} - b x_i) \quad 3)
\end{aligned}$$

---


$$\Pr(y_i=J | x_i) = 1 - \Phi(a - b x_i)$$

で示される。 $\Phi(\cdot)$  は標準正規累積分布関数を示す。

尤度関数と対数尤度関数は

$$\begin{aligned}
L &= \prod_{j=1}^J \left[ \Phi(a_j - b x_i) - \Phi(a_{j-1} - b x_i) \right] \\
\text{Log} L &= \sum_{j=1}^J \left[ \Phi(a_j - b x_i) - \Phi(a_{j-1} - b x_i) \right] \quad 4)
\end{aligned}$$

である (収束については Pratt [1981] 参照)。このとき説明変数  $x$  の限界効果は、 $x$  が連続変数の場合 (微分可能な場合)、

---

6) 定数項の  $b_0$  と閾値  $a$  を同時に識別することはできない。そのために  $b=0$  または  $a=0$  のいずれかの制約をかける必要がある。

$$\frac{\Pr(Y_i=j|x)}{x} = \frac{(a_j - b x_i)}{x} - \frac{(a - b x_i)}{x}$$

$$= [(a_j - b x_i) - (a - b x_i)] b \quad 5)$$

ここで  $(\cdot)$  は標準正規密度関数。

5)式から  $x$  の変化の効果はその係数推計値  $b$  の他に  $[(a_j - b x_i) - (a - b x_i)]$  の値にも依存することが分かる。この  $[\ ]$  内の値は正負いずれをも取ることが出来る。また説明変数が2個以上の場合 ( $x$  と  $z$  とし、 $z$  の係数推計値を  $c$  とする)、 $[\ ]$  の中は

$$[(a_j - b x_i - c z_i) - (a - b x_i - c z_i)] b$$

となるので、他の説明変数の値にも依存する。 $[\ ]$  内が単調減少あるいは単調増加である保証は必ずしも無い。そのために説明  $x$  の効果の解釈を推計結果の係数値  $b$  から直接導くことは容易ではない。

$x$  がダミー変数(離散変数)の場合、その変化の効果は

$$\frac{\Pr(Y_i=j)}{x} = (a_j - b | x_i=1) - (a | x_i=0) \quad 6)$$

で与えられる。その効果はやはり必ずしも線形ではない。

このために順序プロビットモデルの場合説明変数  $x$  の効果の解釈は、他の条件を一定として、得られた係数推計値 ( $b$ ) と説明変数 ( $x$ ) の値を変化させることにより、3)式で計算される確率の変化をみる方がより適切、容易である。

## 2) 推計式と推計結果

(説明変数の候補)

幸せ感として 大変幸せ、 少し幸せ、 余り幸せでない、を取り上げる。

説明変数として生活水準を示す a)消費<sup>7)</sup>、その源泉となる b)収入、及び c)収入と貯蓄残高を取り上げる。なお収入については本人収入と配偶者収入、及び夫婦以外の他の世帯員の収入を加えた世帯収入を考える。推計は基本的にこの3パターンによる。

他の変数の候補としては Oswald[1997]を参考に性別(女性ダミー)、年齢、住居賃貸ダミー(持ち家が既定値)、就業状態(公務員・会社員を併せた勤め人ダミー、自営業ダミー、パートダミーを取り上げる。無職・専業主婦が既定値)、家族構成として一人暮らしダミー、有配偶者ダミー、自分の子供との同居ダミーを各々取り上げる。家庭生活の状況に関するものとして、「食事はたいてい家族と一緒に食べているよ(そう思う)」ダミーを取り上げる。健康状態に関する変数として、「病院に行くことが多い(そう思う)」ダミー(以下「有病」ということがある)を取り上げる。

#### (推計結果)

結果は表 4-1(消費による場合)と表 4-2(収入、収入・資産による場合)に示すとおりである<sup>8)</sup>。ここで注目されることは、一人暮らしダミー、有配偶者にかかるダミー、有病ダミーにかかる係数が全てゼロであるという帰無仮説が、いずれのケースでも棄却されないことである( 、 、 欄参照。自由度3の自乗検定統計量は5%水準で7.814である)。

我々の分析対象は60歳以上の高齢者である。当然ながら配偶者との死別が多い世代である。人生の運命として甘受していることが予想される。高齢者で

---

7) 質問項目は「ご家族の1ヶ月の平均的な家計支出はどのくらいですか」である。質問文からうかがえるように、耐久消費財に対する支出を含み、帰属家賃などは含まない。その意味でミクロ経済学でいう「消費」概念とは異なる。逆に平均的な支出を聞いたことにより、人々が意識する生活費をより直接的に捉えているであろう。

8) 世帯収入に替えて夫婦の収入による推計も行ったが、統計的に有意な結果は得られなかった。報告は省略する。

あるから何らかの病気にかかっているのも自然であろう<sup>9)</sup>。

また収入を取り上げた、欄の結果では閾値である 1 の係数は統計的には有意ではない。これは収入のみによる場合(言い替えれば消費や資産を考慮しないケース)、識別に十分成功していない可能性を示唆している。定年後世代では、生活の源泉が収入よりもストックである資産にあることを示していると言えよう<sup>10)</sup>。

=====表 4-1=====

=====表 4-2=====

前述の通り、順序プロビットモデルの推計結果から得られる係数の解釈は、必ずしも容易ではない。以下では、欄の結果を基に、何が高齢者の幸せ感を支えるのかを明らかにするために、簡単なシュミレーションを行う。

#### 4 高齢者の幸せ感を支えるもの

表 5-1 に 欄に基づくシュミレーション、表 5-2 に 欄に基づくシュミレーション、表 5-3 に 欄に基づくシュミレーション結果が示してある。なお年齢は 70 歳である。また職業は無職・専業主婦(以下「無職」と表記する)である。

##### 1) 消費を用いたケース

(男女間の比較 - 最も幸せなケース)

パネル A に女性、住居は賃貸ではない(一戸建て持ち家、または集合住宅持

---

9) Brickman et al[1978]の身体障害者が健常者に比べて格別不幸に感じているわけではないという結果と共通する。

10) 欄と 欄、欄と 欄の比較から、貯蓄残高と住居賃貸ダミーは明らかに多重共線関係にあることがわかる。

ち家)、子供との同居無し(以下「子供無し」と表記)、食事はたいてい家族と一緒に食べている・そう思う(以下「食事一緒」と表記)という条件の下での選択確率が掲げている。消費が5万円という低水準でも大変幸せの確率は0.57であり、幸せ感が高い。消費が25万円では、大変幸せに感じる確率0.67である。消費が50万という比較的豊かな層では、その確率0.71にまで高まっている。実は、消費に基づく推計では、このグループの幸せ感(不幸せ感)が最も高い(低い)のである。

消費の増加と共に、大変幸せ感の確率が高まっている。30万円から40万円に消費が増加したとき大変幸せ感の確率は0.0169ポイント高まる。ただし40万円から50万円への増加では0.0128ポイントの上昇であり、消費増加の効果は逡減していることが分かる。

パネルBは男性について同様の条件でみたものである。パネルAとBにより男女間の比較を行うことができる。消費水準5万円では大変幸せの確率は0.49であり、女性を-0.0792ポイント下回る。30万円ではその確率0.56であり、やはり女性を-0.120ポイントも下回る。この値は女性の消費が5万円というかなり生活が苦しい水準での値を若干下回っている。逆に余り幸せでないという確率は、消費30万円でも0.16であり、女性よりも0.064ポイント高く、女性の消費5万円というケースでの余り幸せではない確率を若干上回る。このことは、他の条件を一定として、女性の方が幸せと感じる確率が男性よりも高いということを示している。この結果はOswald[1999]の指摘と共通する。

#### (子供との同居の効果)

パネルC, DはパネルA, Bの子供の同居無しを子供の同居ありに条件を変えたものである。これらと比較することにより、子供との同居の有無が高齢者の幸せ感・不幸せ感に及ぼす効果をみることになる。

男女を問わず、全ての消費水準で子供が同居する場合は子供が同居しないケースと比較して、大変幸せの確率は低下し、余り幸せでないの確率は増加している、しかもその低下幅は-0.0755 ~ -0.0678ポイント(女性)、-0.0770 ~ -0.0769ポイント(男性)とかなり高い。これに対し余り幸せでない確率の増加幅は、0.0519 ~ 0.0291ポイント(女性)、0.0660 ~ 0.0432ポイント(男性)である。これは女性

や男性の消費水準が 100 万から 30 万へ低下した場合に匹敵する影響力を持つ (大変幸せの確率:女性 0.75 0.68、男性 0.63 0.56)。

わが国では三世代同居 (extended family) の比率が欧米諸国に比べて多いとされている。そのことはむしろ高齢者を幸せにはしていない。高齢者との同居が家事負担の増加により、既婚女性の就業確率を低下させることは従来から指摘されてきた (松浦・白波瀬 [2002] 参照)。三世代同居は高齢者にとっても負担となっていることが示唆される。このことはコーホートが 30 年前後異なれば、考え方や行動パターンも大きく違うであろうし、世代間の価値観も相違することを反映していよう。

#### (食事を共にする生活)

パネル E, F はパネル C, D から食事を毎日家族と一緒にとるという条件を除いたケースである。いわば家族関係の状況を表す変数として取り上げた食事一緒にの影響をみようというものである。

消費が 30 万円の水準で、女性に関しては大変幸せの確率は 0.43 (パネル E に比べて -0.178 ポイント減)、少し幸せの確率は 0.32 (同 0.058 ポイント増)、余り幸せでないの確率は 0.25 (同 0.120 ポイント増) となる。男性については、大変幸せの確率は 0.31 (パネル E に比べて -0.172 ポイント減)、少し幸せの確率は 0.33 (同 0.020 ポイント増)、余り幸せでないの確率は 0.36 (同 0.147 ポイント増) となる。男女とも大変幸せの確率は激減し、余り幸せではないの確率が大きく増加している。男性では消費水準 40 万円まで、余り幸せではない確率が大変幸せというか確率を上回っている。男性では消費水準が 100 万円でも大変幸せの確率は 0.38 (余り幸せではないの確率 0.29) である。女性でも大変幸せの確率は 0.50 (余り幸せではないの確率 0.19) である。パネル A, B による消費水準が 5 万円という生活の苦しい層に比べても、大変幸せという確率は下回っている (余り幸せではないという確率は上回っている)。これは「食事を毎日一緒にとる」という人間関係、あるいは家族関係が高齢者の幸せ感に強く影響していることを示すものである。

#### (賃貸の不安)



高齢者にとり賃貸住宅への入居、あるいは契約の更新が容易ではないことが指摘されている(たとえば中川[2002]参照)。パネル G, H は住居が賃貸という条件の下でのシミュレーションである。男性は全ての消費水準において、余り幸せではないという確率が大変幸せという確率を上回っている。その差は 0.437 ~ 0.100 ポイントである。男性、賃貸、子供と同居、家族と食事を毎日しない、というのが高齢者の不幸せ感が最も高くなる(大変幸せ感が最も低くなる)組合せである。女性の場合も消費水準が 30 万円までは余り幸せではないという確率が大変幸せという確率を上回っている。

住宅サービスは生活必需財である。賃貸住宅市場における高齢者に対する差別(入居の困難さ)が、生活に対する不安感を大きく高めていることが裏付けられたと言えよう。

=====表 5-1=====

## 2) 収入によるケース

消費に替えて収入を操作したケース(賃貸ではない、子供同居無し、食事一緒という条件)が表 5-2 のパネル I, J である。閾値 1 の係数が統計的に有意ではなく、識別に成功していない可能性があることを前述した。収入の上昇につれて男女とも大変幸せという確率(余り幸せではないという確率)が増加(減少)している。これは先行研究とも共通する。しかし女性についてパネル A と I を比較すると、大変幸せという確率が相当低く、少し幸せという確率がかなり高いことがうかがわれる。男性についても同様であり、全ての収入階層で少し幸せという確率が大変幸せという確率を上回っている。

これは高齢者全体では大変幸せが 0.53、少し幸せが 0.28 という傾向(表 3 参照)を追い切れていない事を示している。引退した高齢者世代に関していうならば、収入は幸せ感を測る指標としては余り適当ではないことを示している。引退世代ではフローの収入では、高齢者問題の所在を把握できないといえよう。

=====表 5-2=====

### 3) 収入・資産によるケース

世帯収入を 700 万円として貯蓄残高を操作したケースが表 5-3 である。

(賃貸ではない、子供無し、食事一緒)

パネル K, L は賃貸ではない、子供無し、食事一緒という条件である。パネル A, B に比肩するケースである。男女とも貯蓄残高が増加すると大変幸せ感(余り幸せではない感)は上昇(低下)している。女性では貯蓄残高が 2000 万円から 2500 に増加すると大変幸せ感(余り幸せではない感)は 0.006 ポイント増加(-0.003 ポイント減少)している。男性では同じく 0.006 ポイントの上昇(-0.004 ポイント減少)である。大変幸せ(余り幸せではない)の水準は、消費による場合とさほど大きな差はない。この事は高齢者の幸せ感を考える上では well-being を表す消費、または level of resources としてのストックが重要な役割を果たすことを示すものと言えよう。

消費のケースと同じく、女性の大変幸せ感(余り幸せではない感)が男性を 0.126 ~ 0.115 ポイント上回っている(-0.081 ~ -0.056 ポイント下回っている)。女性の幸せ感の方がより高いことが示されている。

(賃貸、子供あり、食事一緒無し)

パネル M,N は賃貸、子供あり、食事一緒無しという条件である。パネル G,H に比肩する。女性の大変幸せ感(余り幸せではない感)は 0.28 ~ 0.40、男性では 0.18 ~ 0.28 であり、幸せ感(余り幸せではない感)は著しく低くなっている。改めて高齢者における住居問題、子供との同居による世代間のギャップ、親密な家族関係の喪失が、高齢者の幸せ感に大きく影響する事が理解される。

=====表 5-3=====

## 6 黄昏の幸せのために

高齢者の幸せ感を考える上で、基本となるのは消費、あるいは(金融)資産であることを上のシュミレーションは示している。女性、一戸建て持ち家・集合住宅持ち家、子供とは別居、家族とは毎日食事をする、そういう人々がより幸せに感じている。逆に男性、賃貸住宅、子供と同居、家族とは毎日一緒に食事をしていないという人々は、相対的に余り幸せではない。有病や配偶者の不在、一人暮らしは幸せと感じる確率に影響していない。

この事は政策的にも大きなインプリケーションを持つ。高齢者に対する社会福祉、社会保障政策では消費や資産ではなく、収入を基準に各種の優遇措置が採用されることが多い。しかし政策当局が注目すべき指標は収入ではなく、消費や資産である(Frank[1997]は幸せ感と関連させた分配政策で累進消費税を提案している)。収入に比べ消費や資産の水準あるいはそれらの増減を把握することは、行政当局にとっても容易ではない。その意味で累進消費税は実際的ではないであろう。他方一律の消費税、金融所得課税は逆進性が強く、分配面からみればかなりの問題を抱える(たとえば松浦・滋野[1999]参照)。

全ての高齢者が社会保障政策の対象となるわけではない。記述統計にあり、横浜アンケートにみられる市民の多くの人は大変幸せ、あるいは少し幸せと評価しているのである。課題となるのは少数の高齢者である。その際外部からも容易に識別できるメルクマールは、住居が持ち家か賃貸かということである。賃貸の場合であるパネル G, H は持ち家のケースである E, F に比べて、大変幸せという確率が-0.066 ~ -0.095 ポイント(男性)、-0.086 ~ -0.103 ポイント(女性)下回る。住宅サービスという生活必需財の不安定さという側面のみならず、資産蓄積の厚さの問題をも、住居形態の違いは意味していると考えられるからである<sup>11)</sup>。この賃貸住宅に住む高齢者への福祉を重点的に行うことが、社会全体の安定のためにも望まれる。

もう一つは家族のあり方である。子供との同居は高齢者の幸せ感を抑制する効果があった。高齢者にとり子供は独立することが望ましいということ、こ

---

11) 横浜市での土地の資産価格は相当に高水準であることは容易に想像される。賃貸ダミーと貯蓄残高が多重共線関係にたったことを想起してほしい。

の結果は示唆している。三世代家族(extended family)は長期的に減少する傾向にある。高齢者夫婦のみの世帯の増加あるいは高齢単身者世帯の増加は、高齢者の幸せ感を増加させているのである。そうであるならば、子供の独立・別居を前提とした政策の推進が望まれる。たとえば老親と同居するから優遇するという税制ではなく、別居する親に仕送りするから優遇する(親子の独立した生活を支える)という税制も考えられるであろう。

あるいは高齢者が集える施設を整備し、食事を一緒にすることと同じような効用を得られる環境を整えることも期待される。

## 参考文献

- 黒澤昌子[2002]、「中途採用市場のマッチング - 満足度、賃金、訓練、生産性」  
日本労働研究雑誌、No499,pp.71-85
- 中川雅之[2002]、「監査調査法による賃貸住宅市場における高齢者差別の実証  
分析」大阪大学社会経済研究所 DP,541
- 松浦克己・滋野由紀子[1999]、「利子所得課税と勤労所得課税の比較」会計検査  
研究、第20号,pp.9-22
- 松浦克己・白波瀬佐和子[2002]、「女性の就業と分配、社会保障政策の関係 - 出  
産・育児を中心として」平成13年度厚生科学研究報告書
- Blanchflower,D., Oswald.A and Warr.P[1993], 'Well-being Over Time in Britain and the USA,'  
Paper presented at an Economics of Happiness Conference, LSE
- Brickman,P., Coates.D and Janoff-Bulman.r[1978], 'Lottery Winners and Accident Victims: Is  
Happiness Relative,' Journal of Personality and Social Psychology, Vol.36, pp.917-927
- Clark.A and Oswald.A[1994], 'Unhappiness and Unemployment,' Economic Journal, Vol.104,  
pp.648-659
- Clark,A[1996], 'Job Satisfaction in Britain,' British Journal of Industrial Relations, Vol.34,  
pp.189-217
- Clark.A and Oswald.A[1996], 'Satisfaction and Comparison Income,' Journal of Public  
Economics, Vol.61, pp.359-381
- Dixon,H[1997], 'Controversy : Economics and Happiness,' Economic Journal, Vol.107, pp.1812-  
1814
- Easterlin,R[1974], 'Does economic growth improve the human lot ? Some empirical evidence .'  
In *Nations and Households in Economic Growth* (ed. P.David and M.Reader),  
Academic Press
- Easterlin,R[2001], 'Income and Happiness: Towards a Unified Theory,' Economic Journal,  
Vol.111, pp.465-484

- Elster,J [ 1998 ], ' Emotions and Economic Theory,' Journal of Economic Literature,Vol.36,pp.47-74
- Frank,R [ 1997 ], 'TheFrameofPreferenceas a Public Goods,'Economic Journal,Vol.107,pp.1812-1814
- Franses,P and R.paap [ 2001 ], *Quantitative Models in Marketing Research*, Cambridge University Press
- Kahneman.D., Diner.E and Schwartz N.ed.s [ 1999 ], *Well-being: The Foundation of Hedonic Psychology*, Russel SageFoundation
- Long,J [ 1997 ], *RegressionModels for Categorical and Limited DependentVariables*, Sage
- Mrocczek.D andC.Kolarz [ 1998 ], ' The Effect of Age on Positive and NegativeAffect: A DevelopmentalPerspective onhappiness,' Journal of Personality and Social Psychology, Vol.75, pp.1333-1349
- Ng,Y [ 1997 ], ' A Case for Happiness, Cardinalism, and InterpersonalCompatibility,' Economic Journal, Vol107, pp.1848-1858
- Oswald,A [ 1997 ], 'Happiness and Economic Performance,' Economic Journal, Vol.107, pp.1815-1831
- Pratt.J [ 1981 ], ' Concavity of the Log-Likelihood,' Journal of the American Statiscal Association, Vol.76, pp.137-159
- Rabin,M [ 1998 ], ' Psychology and Economics,' Journal of Economic Literature,Vol.36,pp.47-74
- Veenhoven,R [ 1993 ], *Happiness in Nations: Subjective application of Life in 56 Nations*, Erasmus University

表3 記述統計

	消費		所得		所得・資産	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
大変幸せ	0.5259	0.4996	0.5250	0.4996	0.5207	0.49985
同実数	558		557		479	
少し幸せ	0.2859	0.4519	0.2846	0.4515	0.2815	0.45000
同実数	303		302		259	
余り幸せでない	0.1885	0.3913	0.1904		0.1978	
同実数	200		202		182	
普通	0.1536	0.3608	0.1536	0.3608	0.1598	0.3666
同実数	163		163		147	
少し不幸せ	0.0217	0.1457	0.0236	0.1518	0.0250	0.1562
同実数	23		25		23	
大変不幸せ	0.0132	0.1142	0.0132	0.1142	0.0130	0.1135
同実数	14		14		12	
消費対数	3.2639	0.5069				
消費実額	31.8307	60.3312				
世帯収入対数			6.0450	1.2263	6.1104	1.1430
世帯収入実額			680.66	970.32	689.99	889.45
夫婦収入対数			5.7809	1.3494		
夫婦収入実額			552.69	878.46		
貯蓄残高対数					6.8604	1.8493
貯蓄残高実額					2244.07	3966.73
女性	0.52309	0.4997	0.5099	0.5001	0.4880	0.5001
同実数	555		541		449	
年齢	67.9534	6.4571	68.0845	6.6416	68.1398	6.6961
賃貸住宅	0.0971	0.2962	0.0933	0.2910	0.0957	0.2943
同実数	103		99		88	
有病	0.3120	0.4635	0.3120	0.4635	0.3011	0.4590
同実数	331		331		277	
食事一緒	0.6993	0.4588	0.6937	0.4612	0.7011	0.4580
同実数	742		736		645	
一人暮らし	0.0688	0.2532	0.0656	0.2484	0.0598	0.2372
同実数	73		70		55	
有配偶者	0.8077	0.3943	0.7974	0.4022	0.8065	0.3952
同実数	857		846		742	
子供同居	0.3732	0.4839	0.3883	0.48760	0.3859	0.4871
同実数	396		412		355	
勤め人	0.1093	0.3122	0.1093	0.3122	0.1109	0.3141
同実数	116		116		102	
自営業	0.0839	0.2773	0.0848	0.2788	0.0837	0.2771
同実数	89		90		77	
パート	0.0726	0.2596	0.0754	0.2642	0.0728	0.2600
同実数	77		80		67	
N	1061		1061		920	

注1) 消費、収入、貯蓄残高の実額の単位は万円。

注2) 余り幸せでない=普通+少し不幸せ+大変不幸せ

表 4-1 推計結果(消費による場合)

消費	0.1684** (2.18)	0.1616** (2.15)
女性	0.3156*** (3.98)	0.3154*** (4.11)
年齢	0.0153** (2.40)	0.0138** (2.30)
住居賃借	-0.2637** (-2.14)	-0.2615** (-2.14)
勤め人	0.2454* (1.91)	0.2508** (1.97)
自営業	0.2298* (1.71)	0.2254* (1.68)
パート	0.1223 (0.85)	0.1259 (0.87)
一人暮らし	0.1535 (0.84)	
有配偶者	0.0386 (0.32)	
子供同居	-0.1817** (-2.29)	-0.1991*** (-2.64)
食事一緒	0.4678*** (5.53)	0.4506*** (5.69)
有病	-0.0685 (-0.84)	
1	1.1394** (2.07)	0.9765* (1.92)
2	1.9983*** (3.62)	1.8346*** (3.60)
N	1,061	1,061
対数尤度	-1034.39	-1035.07
尤度比検定	1.36	

注 1) 1、 2 は閾値を指す。

注 2) カッコ内は漸近的 t 値。\*\*\*,\*\*,\* は各々 1%、5%、10% 水準で有意であることを示す。

注 3) 尤度比検定は一人暮らし、有配偶者、有病の係数が全て 0 という帰無仮説に関する検定統計量。

表 4-2 推計結果(収入・資産によるケース)

世帯員収入	0.0623** (2.01)	0.0593** (1.96)	0.0789** (2.13)	0.0704* (1.95)
金融資産			0.0710*** (3.12)	0.0717*** (3.16)
女性	0.3053*** (3.87)	0.3061*** (4.04)	0.3083*** (3.59)	0.3186*** (3.90)
年齢	0.0111* (1.79)	0.0104* (1.78)	0.0104 (1.57)	0.0107* (1.73)
住居賃借	-0.2956** (-2.35)	-0.2956** (-2.37)	-0.1923 (-1.41)	-0.1832 (-1.35)
勤め人	0.1841 (1.44)	0.1861 (1.46)	0.1847 (1.34)	0.1811 (1.33)
自営業	0.1273 (0.94)	0.1260 (0.93)	0.1979 (1.32)	0.2002 (1.34)
パート	0.1110 (0.78)	0.1112 (0.79)	0.2394 (1.53)	0.2273 (1.45)
一人暮らし	0.1070 (0.59)		0.2031 (0.99)	
有配偶者	0.0268 (0.23)		0.0148 (0.11)	
子供同居	-0.2073*** (-2.64)	-0.2204*** (-2.96)	-0.2070** (-2.43)	-0.2284*** (-2.80)
食事一緒	0.4552*** (5.42)	0.4448*** (5.70)	0.4626*** (5.07)	0.4330*** (5.10)
有病	-0.0238 (-0.29)		-0.03078 (0.35)	
1	0.6383 (1.24)	0.5391 (1.17)	1.2446** (2.17)	1.1615** (2.24)
2	1.4907*** (2.88)	1.3912*** (3.00)	2.0933*** (3.64)	2.0094*** (3.87)
N	1,061	1,061	920	920
対数尤度	-1037.54	-1037.75	-894.43	-895.08
尤度比検定	0.42		1.29	

注 1) 1、 2 は閾値を指す。

注 2) カッコ内は漸近的 t 値。\*, \*\*, \*\*\* は各々 1%、5%、10% 水準で有意であることを示す。

注 3) 尤度比検定は一人暮らし、有配偶者、有病の係数が全て 0 という帰無仮説に関する検定統計量。



表 5-1 幸せ確率(年齢 70 歳,無職・専業主婦)消費によるケース

パネル A 女性、賃貸ではない、子供無し、食事一緒、消費を操作

消費	余り幸せではない	少し幸せ	大変幸せ
5	0.15335	0.28150	0.56515
10	0.12778	0.26241	0.60982
15	0.11427	0.25040	0.63533
20	0.10533	0.24160	0.65308
25	0.098747	0.23463	0.66662
30	0.093598	0.22888	0.67753
40	0.085880	0.21969	0.69443
50	0.080230	0.21251	0.70726
60	0.075826	0.20662	0.71756
70	0.072248	0.20163	0.72612
80	0.069254	0.19731	0.73344
90	0.066694	0.19350	0.73981
100	0.064466	0.19010	0.74544

パネル B 男性、賃貸ではない、子供無し、食事一緒、消費を操作

消費	余り幸せではない	少し幸せ	大変幸せ
5	0.23985	0.32030	0.43985
10	0.20566	0.30892	0.48542
15	0.18707	0.30072	0.51221
20	0.17454	0.29427	0.53119
25	0.16519	0.28895	0.54586
30	0.15780	0.28439	0.55780
40	0.14659	0.27687	0.57654
50	0.13827	0.27077	0.59096
60	0.13171	0.26564	0.60265
70	0.12634	0.26120	0.61246
80	0.12181	0.25729	0.62090
90	0.11791	0.25379	0.62830
100	0.11450	0.25062	0.63488

パネル C 女性、 賃貸ではない、子供有り、食事一緒、消費を操作

消費	余り幸せではない	少し幸せ	大変幸せ
5	0.20525	0.30875	0.48600
10	0.17417	0.29407	0.53176
15	0.15745	0.28417	0.55837
20	0.14626	0.27664	0.57711
25	0.13795	0.27053	0.59152
30	0.13141	0.26539	0.60320
40	0.12152	0.25703	0.62145
50	0.11422	0.25036	0.63542
60	0.10849	0.24480	0.64671
70	0.10382	0.24003	0.65615
80	0.099883	0.23587	0.66425
90	0.096505	0.23216	0.67133
100	0.093555	0.22883	0.67762

パネル D 男性、 賃貸ではない、子供有り、食事一緒、消費を操作

消費	余り幸せではない	少し幸せ	大変幸せ
5	0.30586	0.33116	0.36298
10	0.26683	0.32634	0.40683
15	0.24523	0.32169	0.43308
20	0.23049	0.31762	0.45189
25	0.21941	0.31404	0.46655
30	0.21059	0.31084	0.47857
40	0.19710	0.30533	0.49757
50	0.18701	0.30069	0.51231
60	0.17900	0.29666	0.52434
70	0.17240	0.29310	0.53450
80	0.16682	0.28990	0.54328
90	0.16198	0.28701	0.55101
100	0.15774	0.28435	0.55790

パネル E 女性、 賃貸ではない、子供有り、食事無し、消費を操作

=====

消費	余り幸せではない	少し幸せ	大変幸せ
5	0.35478	0.33162	0.31360
10	0.31304	0.33159	0.35536
15	0.28965	0.32968	0.38067
20	0.27357	0.32748	0.39895
25	0.26141	0.32531	0.41328
30	0.25168	0.32324	0.42508
40	0.23673	0.31944	0.44383
50	0.22548	0.31606	0.45846
60	0.21652	0.31302	0.47046
70	0.20910	0.31027	0.48062
80	0.20280	0.30776	0.48944
90	0.19734	0.30544	0.49722
100	0.19253	0.30329	0.50418

パネル F 男性、 賃貸ではない、子供有り、食事無し、消費を操作

=====

消費	余り幸せではない	少し幸せ	大変幸せ
5	0.47725	0.31120	0.21155
10	0.43177	0.32195	0.24627
15	0.40555	0.32653	0.26792
20	0.38719	0.32897	0.28384
25	0.37312	0.33039	0.29649
30	0.36174	0.33124	0.30702
40	0.34404	0.33200	0.32395
50	0.33054	0.33211	0.33735
60	0.31967	0.33188	0.34845
70	0.31060	0.33146	0.35793
80	0.30284	0.33094	0.36622
90	0.29606	0.33035	0.37359
100	0.29006	0.32973	0.38022

パネル G 女性、 賃貸、子供有り、食事無し、消費を操作

消費	余り幸せではない	少し幸せ	大変幸せ
5	0.45585	0.31669	0.22747
10	0.41072	0.32573	0.26356
15	0.38482	0.32924	0.28595
20	0.36674	0.33090	0.30236
25	0.35292	0.33171	0.31538
30	0.34176	0.33205	0.32619
40	0.32445	0.33202	0.34354
50	0.31127	0.33150	0.35723
60	0.30068	0.33076	0.36856
70	0.29185	0.32992	0.37823
80	0.28430	0.32903	0.38667
90	0.27773	0.32812	0.39415
100	0.27191	0.32721	0.40088

パネル H 男性、 賃貸、子供有り、食事無し、消費を操作

消費	余り幸せではない	少し幸せ	大変幸せ
5	0.58101	0.27501	0.14398
10	0.53573	0.29266	0.17161
15	0.50899	0.30176	0.18925
20	0.48998	0.30760	0.20242
25	0.47525	0.31175	0.21300
30	0.46324	0.31488	0.22188
40	0.44436	0.31932	0.23631
50	0.42981	0.32234	0.24785
60	0.41798	0.32452	0.25750
70	0.40804	0.32615	0.26581
80	0.39947	0.32741	0.27312
90	0.39196	0.32840	0.27964
100	0.38527	0.32919	0.28554

表 5-2 所得によるケース

パネル I 女性、 賃貸ではない、 子供無し、 食事一緒、 所得を操作

所得	余り幸せではない	少し幸せ	大変幸せ
100	0.11307	0.42087	0.46606
200	0.10538	0.41219	0.48243
300	0.10106	0.40692	0.49202
400	0.098072	0.40309	0.49883
500	0.095801	0.40008	0.50411
600	0.093974	0.39760	0.50843
700	0.092450	0.39547	0.51208
800	0.091145	0.39362	0.51524
900	0.090005	0.39197	0.51802
1000	0.088994	0.39049	0.52051
1200	0.087264	0.38792	0.52482
1500	0.085182	0.38473	0.53009
2000	0.082553	0.38057	0.53687

パネル J 男性、 賃貸ではない、 子供無し、 食事一緒、 所得を操作

所得	余り幸せではない	少し幸せ	大変幸せ
100	0.18293	0.46928	0.34779
200	0.17224	0.46466	0.36310
300	0.16617	0.46167	0.37217
400	0.16195	0.45941	0.37864
500	0.15872	0.45759	0.38368
600	0.15612	0.45606	0.38782
700	0.15394	0.45473	0.39133
800	0.15207	0.45356	0.39438
900	0.15043	0.45250	0.39707
1000	0.14897	0.45155	0.39948
1200	0.14648	0.44986	0.40366
1500	0.14346	0.44774	0.40880
2000	0.13963	0.44493	0.41544

表 5-3 収入・貯蓄残高によるケース

パネル K 女性、 賃貸ではない、子供無し、食事一緒、貯蓄を操作

貯蓄	余り幸せではない	少し幸せ	大変幸せ
100	0.13380	0.26336	0.60285
200	0.12337	0.25476	0.62187
300	0.11754	0.24959	0.63287
500	0.11048	0.24295	0.64657
750	0.10510	0.23759	0.65731
1000	0.10139	0.23375	0.66486
1500	0.096335	0.22829	0.67538
2000	0.092861	0.22438	0.68276
2500	0.090231	0.22133	0.68844
3000	0.088123	0.21883	0.70025
5000	0.082414	0.21180	0.70578
7000	0.078809	0.20715	0.71404
10000	0.075118	0.20221	0.72267

パネル L 男性、 賃貸ではない、子供無し、食事一緒、貯蓄を操作

貯蓄	余り幸せではない	少し幸せ	大変幸せ
100	0.21477	0.30833	0.47691
200	0.20055	0.30274	0.49671
300	0.19250	0.29920	0.50831
500	0.18264	0.29446	0.52290
750	0.17505	0.29049	0.53446
1000	0.16978	0.28757	0.54265
1500	0.16254	0.28330	0.55416
2000	0.15752	0.28018	0.56230
2500	0.15370	0.27771	0.56859
3000	0.15062	0.27565	0.57373
5000	0.14222	0.26975	0.58803
7000	0.13687	0.26574	0.59739
10000	0.13134	0.26141	0.60725

パネル M 女性、 賃貸、 子供有り、 食事無し、 貯蓄を操作

貯蓄	余り幸せではない	少し幸せ	大変幸せ
100	0.39584	0.32448	0.27969
200	0.37683	0.32653	0.29664
300	0.36584	0.32739	0.30677
500	0.35216	0.32809	0.31974
750	0.34143	0.32836	0.33020
1000	0.33390	0.32840	0.33771
1500	0.32339	0.32822	0.34839
2000	0.31602	0.32793	0.35604
2500	0.31035	0.32762	0.36202
3000	0.30576	0.32731	0.38080
5000	0.29304	0.32616	0.38080
7000	0.28480	0.32518	0.39002
10000	0.27619	0.32395	0.39986

パネル N 男性、 賃貸、 子供有り、 食事無し、 貯蓄を操作

貯蓄	余り幸せではない	少し幸せ	大変幸せ
100	0.52173	0.29485	0.18342
200	0.50192	0.30117	0.19691
300	0.49033	0.30460	0.20507
500	0.47574	0.30864	0.21563
750	0.46418	0.31159	0.22423
1000	0.45599	0.31356	0.23045
1500	0.44449	0.31613	0.23938
2000	0.43636	0.31782	0.24582
2500	0.43007	0.31905	0.25089
3000	0.42494	0.32000	0.26697
5000	0.41064	0.32239	0.26697
7000	0.40129	0.32376	0.27495
10000	0.39144	0.32501	0.28355